様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８０８７５

研究課題名（和文）思春期における心理的柔軟性を高める介入プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of the program to intervene adolescent psychological inflexibility

研究代表者
石津　憲一郎（Ishizu, Kenichiro）

富山大学・大学院教職実践開発研究科・准教授

研究者番号：４０５３０１４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：中学生の心理的柔軟性を高めるプログラムの開発を目的とした一連の研究として，5つの基礎的研究及び1つの介入研究を行った。まずは，心理的柔軟性を構成する要素として注目されている体験回避と認知的フュージョンが思春期の心理的適応にどのような影響を及ぼすのかを6つの調査研究から検討した。その結果，体験回避は心理的適応の維持に関連していることが示された。続いて，こうした基礎的研究の結果に基づき，中学生の心理的柔軟性を高める学級集団を対象とした介入プログラムを作成し，実施した。その結果，介入群は統制群と比較し，ストレスや体験回避の得点に変化が見られ，介入プログラムの一定の妥当性が示された。

研究成果の概要（英文）：In this study, we aimed to develop the program of intervene adolescent psychological inflexibility and conducted five investigation studies and one intervention study. First, we investigated how experiential avoidance and cognitive fusion which consist of psychological inflexibility influenced adolescent psychological well- being. The results showed that experiential avoidance and cognitive fusion played some important roles in the process of well-being among adolescents. Additionally, we made an ACT based intervention program which can be carried out in the junior high school students' classroom and examined the effects of the program. The results showed that ACT intervention prevented to increase experiential avoidance, enhanced self-esteem, and reduced depressive symptom, compared to the control group.

研究分野：教育心理学，臨床心理学

キーワード：思春期　学校適応　心理的柔軟性　体験回避　認知的フュージョン

１．研究開始当初の背景

心理的柔軟性とは「生きていくために立ちはだかる問題や課題に対し，そこから回避することなくより効果的に反応する力」として定義される（Harris,2009）。心理的柔軟性は，第三世代の認知行動療法である ACT(Acceptance and Commitment Therapy）の中心概念でもあり，そこでは悩まないことやストレスがないことを目指すのではなく，悩みの根源を観察しながらもうまく距離を取り，自分の人生をしっかりと生きることを目指している。心理的柔軟性の低さは，自分が望まない嫌な思考，感情，感覚や記憶といったものを排除しようとする“体験回避”と，自分の思考に囚われ，身動きが取れなくなる“認知的フュージョン”から構成される（Greco et al,2008)。海外において，この心理的柔軟性と様々な心理的変数との関連が実証され始めてきているが，まだ数は非常に少なく，日本においては思春期における心理的柔軟性を扱った研究はほとんど蓄積されていない。子供たちが自らの人生を生きていくためには，この心理的柔軟性への介入を含めた包括的な心理的支援が必要だと考えられる。本研究ではこの心理的非柔軟性を測定するために，Greco et al(2008)によって作成された AFQ-Y（日本語としては Ishizu et al, 2014）を用いて検討行う。AFQ は Avoidance and Fusion Questionnaire の頭文字となっており，体験回避と認知的フュージョンを測定するための尺度である。

２．研究の目的

そこで本研究では，日本においてはほとんど研究が行われてこなかった，思春期における心理的（非）柔軟性に着目し，その心理的適応に対する作用を検討し，そうした結果を踏まえ，心理的柔軟性を高めるためのプログラムの効果を検証することを目的とする。

３．研究の方法

研究は主に５つの調査研究と，１つの介入研究に分類される。いかにそれぞれの研究目的とその方法について挙げる。

研究①AFQ と抑うつ，ストレッサーとの関連
調査協力者：中学生 445 名（平均年齢 13.85 歳，標準偏差 0.86 歳）を対象とした。
測度：AFQ-Y8（Ishizu et al，2014），学校ストレッサー（岡安・高山，1999）自己ストレッサー（服部・島田，2003），子供用抑うつ尺度（村田ら，2006）。
手続き：すべての調査協力者に，上記の尺度を 2 回回答してもらった。1 回目の回答と 2 回目の回答の間は 1 か月の期間が設けられた。

研究②AFQ とストレッサー，ストレス反応との短期相互影響性の検討（交差遅れ効果モデルによる検討）
調査協力者：中学生 688 名（平均年齢 13.28 歳，標準偏差 0.66 歳）を対象とした。
測度：：AFQ-Y8（Ishizu et al，2014），学校ストレッサー（岡安・高山，1999），ストレス反応尺度（岡安・高山，1999）
手続き：短期的な体験回避とストレスの相互影響性（ストレスの短期的的なプロセス）を検討するために，すべての調査協力者に 1 週間おきに 3 回，上記の測度への回答を求めた。

研究③学校ストレッサーが AFQ に及ぼす影響（マルチレベル分析による検討）
調査協力者：中学生 856 名（平均年齢 13.18 歳）
測度：AFQ-Y8（Ishizu et al，2014），学校ストレッサー（岡安・高山，1999）
手続き：個人レベルと学級レベルのストレッサーが AFQ とどのように関連するのかを示すために，26 学級を対象に分析を行った。

研究④学級風土が体験回避に及ぼす影響（マルチレベル分析による検討）
調査協力者：中学生 1178 名（平均年齢 13.30 歳）
測度：AFQ-Y8（Ishizu et al，2014），学級風土（伊藤・松井，2001）から「自然な自己開示」「規律正しさ」「学習への志向性」を測定。
手続き：個人レベルと学級レベルの学級風土が AFQ とどのように関連するのかを示すために，33 学級を対象に分析を行った。

研究⑤受験生の学業コーピングに影響を与える体験回避の作用
調査協力者：中学 3 年生 277 名（平均年齢 14.85 歳，標準偏差 0.41 歳）
測度：AFQ-Y8（Ishizu et al，2014），学業コーピング（神藤，1999）
手続き：受験における学業コーピングスタイルへの AFQ の影響を検討するために，受験期の 1 月中旬，2 月中旬，3 月上旬の 3 回にわたって上記の内容を回答してもらった。

研究⑥思春期の心理的柔軟性を高める集団プログラムの効果検証
調査協力者：統制群 266 名，介入群 81 名の中学 3 年生，平均年齢は 14.78 歳（SD0.42）
測度： AFQ-Y（Ishizu et al., 2014），自尊感情（内田・上埜，2010），ストレス反応（岡安・高山,1999）。また各ワークについての理解度について 4 件法で回答を求めた。
手続き：本研究では ACT のエッセンスをもつ介入プログラムを全 4 回で構成した。作成したプログラムは現職の教員にアドバイスをもらいながら，中学生にとって理解できるものにしていった。各回のプログラムは以下の狙いをもち行われた。

１）自分が大切にしたい価値について
２）脱フュージョンの体験
３）呼吸法とアクセプタンス
４）これまでのまとめとコミットメント

効果指標（測度）については介入前（プレ），介入後（ポスト），フォローアップの 3 回測定した。それぞれの期間はおよそ 1 か月であった。

４．研究成果

研究①

本研究では，素因ストレスモデルの視点から，まずはストレッサーの影響を AFQ が強めるかを検討するために，Time１の抑うつ得点を共変量，Time2 の得点を従属変数，独立変数として性別，AFQ，ストレッサー，ストレッサーと AFQ の交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。その結果，AFQ とストレッサーの交互作用は有意な影響を及ぼしていないことが示された。そこで，ストレッサー，AFQ，抑うつの縦断的な関連性を検討するために，2 時点の得点を用いて交差遅れ効果モデルの検討を行った。モデルの適合度は十分であり（$\chi^2(26) = 25.35$，$p = .499$，GFI = .989，AGFI = .954，CFI = 1.00，RMSEA = .000），AFQ が抑うつを予測するというよりは，むしろ抑うつや AFQ が後のストレッサーを予測するという結果が得られた。また，抑うつはのちの AFQ に正の影響を与えることも示された。上記の結果から，AFQ は抑うつの素因としては認められなかったが，後のストレッサーに影響することが示された。様々な体験回避が起こることで，むしろストレッサーを呼び込んでしまい，抑うつが持続するという可能性を示唆するものであった。しかし本研究は 2 時点での相互影響性のみしか検討できず，AFQ から影響を受けたストレッサーが次にどのような働きをするのかを明確にする必要性が示唆された。

研究②

上記の研究①の限界を踏まえ，ここでは 3 ショットのデータを扱い，AFQ，ストレッサー，ストレス反応についての短期的な相互影響性を検討した。3 時点のデータについて，上記と同様に交差遅れ効果モデルの検討を行った。モデルの適合度は十分であった（$\chi^2(10) = 6.07$，$p = .81$，GFI = .997，AGFI = .987，CFI = 1.00，RMSEA = .000）。1 週間のタイムラグの視点から見ると，AFQ はのちのストレス反応に正の影響を与え，また AFQ から影響を受けたストレス反応はさらに次の AFQ に正の影響を与えることが示された。また，AFQ はストレッサーにも生の影響を与え，そのストレッサーはさらに次の AFQ にも影響を与えていることが示された（Table1）。この結果から，短期的なストレス維持について，AFQ がストレス反応とストレッサーを喚起することで，そのストレス反応とストレッサーは次の AFQ に影響を与えるという，悪循環が示された。以上の結果から，体験回避が短期的なストレスの発生過程に大きな影響を与えていることを示唆していると判断できた。

研究③

使用した尺度得点の学級レベル（26 学級）での級内相関は，男子で 0.33―.123，女子で 003―.095，デザインエフェクトは男子で 1.48―2.77，女子で 1.05―2.38 であった。そのため，学校ストレッサーの各下位尺度を説明変数，AFQ-Y 得点を基準変数とする，マルチレベル分析を適用した。

モデル適合度の指標は，男子では RMSEA＝.00，CFI＝1.00，SRMR は，within レベル＝.00，between レベル＝.01，女子は RMSEA＝.00，CFI＝1.00，SRMR は within レベル＝.00，between レベル＝.03 であり，データの当てはまり具合は良好と判断された。なお学校ストレッサーを基準変数とした場合，AIC の値が男女とも高くなったため，学校ストレッサーを説明変数とするモデルが妥当と判断した。分析の結果，男女とも，within レベルで 3 つのストレッサーから AFQ-Y へのパス係数がいずれも有意であった。一方 between レベルでは，男子のみ，教師ストレッサーからのパス係数が有意であった。

研究②と同様に，AFQ はストレッサーによって喚起される傾向が示された。男女とも個人レベルでは，ストレッサーから AFQ へ生の有意なパス係数が得られた。学校で経験するストレッサーは中学生にとって不快な出来事であるため，これらを多く経験するほど，ストレッサーに関連するネガティブな思考や感情を回避しようとしてしまい，体験的回避の傾向は強まってしまうのかもしれない。さらにパス係数の値から，学校ストレッサーの中でも友人関係ストレッサーからの影響が相対的に強いことが考えられる。学級集団レベルの結果から，教師ストレッサーの多い学級の男子は，体験的回避が低い可能性が示唆された。思春期の中学生男子は，教師ストレッサーに対して怒り感情を率直に表出することで，体験的回避が弱まる可能性も示唆されたといえる。

Table1 Parameter Estimates for the Final Cross-Lagged Model

			Estimate	
Regression			standerdized	SE
AFQ T1	→	AFQ T2	0.72**	0.03
		Stress Response T2	0.17**	0.06
		Stressor T2	0.10**	0.04
		AFQ T3	0.32**	0.05
		Stress Response T3	n.s	-
		Stressor T3	n.s	-
Stress Response T1	→	AFQ T2	n.s	-
		Stress Response T2	0.68**	0.03
		Stressor T2	n.s	-
		AFQ T3	n.s	-
		Stress Response T3	0.26**	0.04
		Stressors T3	n.s	
Stressor T1	→	AFQ T2	n.s	-
		Stress Response T2	n.s	-
		Stressor T2	0.67**	0.40
		AFQ T3	-0.09 *	0.05
		Stress Response T3	n.s	-
		Stressor T3	0.18**	0.04
AFQ T2	→	AFQ T3	0.44**	0.04
		Stress Response T3	0.08**	0.05
		Stressor T3	0.08**	0.03
Stress Response T2	→	AFQ T3	0.14**	0.03
		Stress Response T3	0.62**	0.04
		Stressor T3	0.06 †	0.02
Stressor T2	→	AFQ T3	0.11**	0.05
		Stress Response T3	n.s	-
		Stressor T3	0.63**	0.04
Correlations			coefficient	
AFQ T1	↔	Stress Response T1	0.65**	3.16
AFQ T1	↔	Stressor T1	0.48**	1.60
Stress Response T1	↔	Stressor T1	0.57**	2.84
AFQ T2	↔	Stress Response T2	0.36**	1.29
AFQ T2	↔	Stressor T2	0.28**	0.80
Stress Response T2	↔	Stressor T2	0.40**	1.17
AFQ T3	↔	Stress Response T3	0.28**	0.90
AFQ T3	↔	Stressor T3	0.23**	0.78
Stress Response T3	↔	StressorsT3	0.36**	0.56

Note. AFQ= Avoidace and Fusion Questionnaire

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

研究④

使用した尺度得点の学級レベル（33 学級）での級内相関は，男子で.036―.105，女子で004―.258，デザインエフェクトは男子で1.57―2.65，女子で1.06―5.15 であった。そのため，学級風土の各下位尺度を説明変数，AFQ-Y 得点を基準変数とする，マルチレベル分析を適用した。モデル適合度の指標は，男子では RMSEA＝.00，CFI＝1.00，SRMR は，within レベル＝.00，between レベル＝.01，女子は RMSEA＝.00，CFI＝.99，SRMR は within レベル＝.00，between レベル＝.05 であり，データの当てはまり具合は良好と判断された。なお学級風土を基準変数とした場合，AIC の値が男女とも高くなったため，学級風土を説明変数とするモデルが妥当と判断した。

分析の結果，男女とも，within レベルにおける自己開示から AFQ へのパス係数が有意であった。Within レベルの他の変数，および between-level の全ての変数からのパス係数は，いずれも非有意であった。男女とも個人レベルにおいて，学級風土の「自然な自己開示」から AFQ へ負のパス係数が得られた。このことから，“自分の学級は自然な自己開示がしやすい”と認識している生徒は，体験的回避の傾向が弱くなる可能性がある。「自然な自己開示」の項目内容は，自分の気持ちを素直に，あるいは気軽に話せる，といったものであるため，こういった雰囲気を認知している生徒は，自身のネガティブな思考や感情も素直に話せたり，それを周囲に受容してもらう経験が多く，その結果，体験的回避の傾向が弱くなることが考えられる。一方，他の下位尺度からのパス係数は非有意であった。クラス内の規律の正しさや学習を志向する雰囲気の認知は必ずしも体験的回避と関連しているとはいえない可能性があり，さらなる検討が必要である。

また，学級集団のレベルにおいては，学級風土から AFQ-Y へのパス係数はいずれも非有意であった。このことから，学級全体の風土からの体験的回避への影響は低い可能性が考えられる。特に，個人レベルで関連が示された「自然な自己開示」は，学級集団レベルでは関連が示されなかったため，自然な自己開示がなされやすい学級の所属する中学生の体験的回避傾向が低くなる，とまではいえず，あくまで個人レベルでの認知が影響していることが考えられる。この結果は，個人を対象としたアプローチの重要性を示唆する結果ともいえると判断できた。

研究⑤

中学 3 年生の受験ストレスへのコーピングに，体験回避がどのような影響を及ぼすか，短期縦断的に検討した。学業コーピングの 4 つの因子である，問題解決的対処，回避的対処，積極的情動中心対処，他者依存的情動中心対処に AFQ がどのように影響するのかを検討するために，潜在成長曲線モデルによる検討を行った。問題解決的対処については，AFQ が Slope に対して負の影響を与えており，AFQ が高いものは問題解決的対処が受験に近づくにつれて低まっていくことが示された。回避的対処については，AFQ は intercept に正の影響を与えており，AFQ が高いものは回避的対処を行いやすいことが示された（Table2）。他者依存的情動中心対処については，AFQ はその slope に負の影響を与えており，AFQ が高いものは他者に感情を吐露しにくくなることが示された。以上の結果は，体験回避への介入が受験を乗り越えていくための一つの要因になる可能性が示唆された。

Table2. Influence of AFQ and gender on coping strategies.

	β	SE	p
AFQ → slope of dependent emotion focused coping	-.21	.03	=.07
gender → intercept of dependent emotion focused copi	.46	.28	<.001
AFQ → intercept of avoidant coping	.31	.02	<.001
AFQ → slope of problem solving coping	-.21	.02	=.04

note) only significant effect were described.

研究⑥

以上の基礎的研究の結果を踏まえると，AFQ への介入は心理的健康の維持や，受験を乗り越えていくための一つの重要な手立てともなることが示されてきた。そこで，ACT 理論に基づいた体験回避への介入について，中学生を対象とする心理教育的プログラムの作成を行い，その効果を検証した。

群（統制・介入）と時期（プレ・ポスト・フォロー）を独立変数，AFQ,自尊感情，ストレス反応の各下位尺度を従属変数とした分散分析を行った。まず，心理的柔軟性得点については群と時期の交互作用が有意であり(F(2,570)=3.12, p<.05)，単純主効果の検討の結果，非柔軟性得点が統制群では上昇していった（(F(2,570)=16.03, p<.01)。自尊感情得点においても群と時期の交互作用が有意であり(F(2,570)=6.39, p<.01)，単純主効果の検討の結果，介入群においてプレからポストにかけて得点が上昇した（F(2,570)=12.58, p<.01)。

以上の結果，学級集団における ACT プログラムは自尊感情や一部のストレス反応，および心理的柔軟性に影響を与えうることが示された。全 4 回のワークの「理解度」については，各回ともクラス平均値が 3.2～3.5.以上であり，「役立つか否か」についても同様の値が示された。今回のプログラムは受験期を対象としたものであり，受験や学業に関するストレッサーに多く直面する時期に実施した。今後は，グループでのディスカッション等を含めたワークを設定するなど，その効果を改めて検証していく必要があると思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

① 小川徳重・<u>石津憲一郎</u>・下田芳幸　通信制高校の教育相談における外部機関との連携

の在り方についての検討(2)―他機関との連携について 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要，第9巻，97-111頁(査読有)
② 荒居知佳・石津憲一郎　非行傾向行為の抑止要因としてのセルフコントロールと家族関係に対する居場所感についての検討　富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要，第9巻，113-123頁(査読有)
③ 綿谷 日香莉・石津憲一郎　ネガティブな反すうと自尊感情および自尊感情の変動性との関連　富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要，第9巻，125-131頁(査読有)
④ 大島すみか・石津憲一郎　自我同一性，時間的展望，心理的非柔軟性が大学生の無気力に及ぼす影響について　富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要，第10巻，1-10頁(査読有)
⑤ 赤川果奈・下田芳幸・石津憲一郎　中学生の友人関係，自尊感情及び学校適応感の相互作用　富山大学人間発達科学部紀要，第 10 巻，1-10頁(査読有)
⑥ 下田芳幸・石津憲一郎・大月 友　中学生のいじめ傍観・仲裁行動と自己価値の随伴性，体験的回避，抑うつの関連　心理臨床学研究，第33巻，602-612頁(査読有)
⑦ 下田芳幸・石津憲一郎・大月 友　中学生における社交不安傾向の 1 年間の変化パターン 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要，第1巻，57-70頁(査読無)
⑧ 菓子井佐英子・下田芳幸・石津憲一郎　発達障害児をもつ養育者の小学校就学時における学級決定の心的プロセスについての研究　発達・療育研究，第32巻，25-38頁(査読有)
⑨ 石津憲一郎　体験回避と非行傾向行為―家族における心理的居場所を含めて―　富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要，第11巻，15-20頁(査読有)
⑩ 二森優希・石津憲一郎　第二反抗期経験の有無と過剰適応が青年期後期の心理的自立と対人態度に与える影響　富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要，第11巻，21-27頁(査読有)
⑪ 安中幸恵・石津憲一郎　大学生の自己愛傾向が twitter 利用におけるストレス反応に及ぼす影響　富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要，第11巻，29-36頁(査読有)

〔学会発表〕(計17件)
①Ishizu, K., Shimoda, Y., & Ohtsuki, T. (2014) Developing the scale regarding psychological inflexibility in Japanese early adolescence. Poster presented at 30th Annual Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, Honolulu.
②石津憲一郎　思春期における自尊感情の変動性（2）　日本心理臨床学会33回大会，パシフィコ横浜
③ 池田忠義(指定討論者)・石津憲一郎(司会)・松川春樹（企画）・遠藤歩（話題提供者）・内田美子(話題提供者)・大島進吾(話題提供者)「心理臨床における「つまずき」を考える(6)」　日本心理臨床学会33回大会自主シンポジウム，パシフィコ横浜
④石津憲一郎・下田芳幸　中学生における随伴性自己価値と自尊感情　―怒り処理の視点から―　日本学校心理学会第16回大会，　玉川大学
⑤ 樫村正美・石津憲一郎・下田芳幸　感情とのかかわり方の違いと抑うつ傾向　日本心理学会第78回大会，　同志社大学
⑥ 大月　友・鬼嶋雄三・上村　碧・石津憲一郎・下田芳幸　中学生・高校生の登校回避感情に対する心理的柔軟性モデルの検討
日本認知・行動療法学会第40回大会　富山国際会議場
⑦ Ishizu, K., Shimoda, Y., & Ohtsuki, T. Effects of experiential avoidance and cognitive fusion on psychological stress responses among Japanese adolescents. Poster session presented at Association for Contextual Behavioral Science World Conference 13, Berlin.
⑧ Ishizu, K., Shimoda, Y., & Ohtsuki, T. Relationships among Experiential Avoidance, Psychological Stressors, and Depression. Poster session presented at American Psychological Association Annual Convention, Toronto.
⑨橋本創一（企画・司会）・石津憲一郎（話題提供者）・熊谷亮（話題提供者）・工藤浩二（話題提供者）・石本豪（話題提供者）・堀田香織（指定討論者）　「学校でうまく生活するために必要なスキルと環境は何か)」 日本教育心理学会第57回総会回 自主企画シンポジウム，新潟コンベンションセンター
⑩ 下田芳幸・石津憲一郎・大月　友・　中学生のいじめ場面での傍観／仲裁行動の心理的要因の検討―自己価値の随伴し，体験的回避および抑うつの差異の検討　日本心理臨床学会第 34 回大会発表論文集，274，神戸国際会議場
⑪ 池田忠義(指定討論者)・石津憲一郎(司会)・松川春樹（企画）・遠藤歩（話題提供者）・内田美子(話題提供者)・大島進吾(話題提供者)「心理臨床における「つまずき」を考える(7)」　日本心理臨床学会34回大会自主シンポジウム，神戸国際会議場
⑫ 水野治久（企画／話題提供）・本田真大（企画／話題提供者）・永井智（話題提供者）・木村真人（司会）・飯田敏晴（司会）・石津憲一郎（指定討論者）・五十嵐哲也（指定討論者）　「学校領域における援助要請研究の個別事例への応用」　日本心理学会79回大会ワークショップ，名古屋国際会議場
⑬ Ishizu, K., Shimoda, Y., & Ohtsuki, T. Experiential avoidance and coping strategies for academic stress among junior high school students preparing for high school examinations: a latent curve model International Congress of Psychology, Yokohama.
⑭ 石津憲一郎・下田芳幸・大月　友　学級集

団で行うＡＣＴプログラムの　　介入効果の検証―受験期におけるパイロットスタディ―　日本学校心理学会第 18 回大会、名古屋大学
⑮ 石津憲一郎・下田芳幸・大月　友　学級集団で行うＡＣＴプログラムの　　介入効果の検証―受験期におけるパイロットスタディ―　日本学校心理学会第 18 回大会、名古屋大学
⑯ 下田芳幸・大月　友・石津憲一郎　青年期用価値とコミットメント　尺度の研究 (2) ―下位尺度得点のパターンから見た各世代の特徴―日本教育心理学会第 58 回総会、サンポート高松
⑰ Shimoda, Y., Ishizu, K., & Ohtsuki, T. Effects of experiential avoidance on social anxiety among Japanese adolescents
II International Congress and VI National Symposium of Clinical and Health Psychology on Children and Adolescents, Barcelona.

〔図書〕（計 4 件）
① 石津憲一郎　過剰適応と学校適応　―思春期の子どもの成長を考える―　　教育と医学（慶応大学出版会），第 62 巻，12-19 頁
② 石津憲一郎　自尊感情の心理学―理解を深める「取扱説明書」（中間玲子編著）金子書房
③ 石津憲一郎　過剰適応という名の不適応―過剰適応は本当に「不適応」なのか　児童心理臨時増刊 2016 年 2 月号，51-57 頁
④ Ciarrochi, J.V., Hayes, L., & Bailey, A.（著）大月 友・石津憲一郎・下田芳幸（監訳）セラピストが 10 代のあなたにすすめる ACT ワークブック　悩める人がイキイキ生きるための自分のトリセツ　星和書店

６．研究組織
(1)研究代表者
石津憲一郎　（Ishizu Kenichiro）
富山大学大学院教職実践開発研究科・准教授
研究者番号：40530142

(2)研究分担者
下田芳幸（Shimoda Yoshiyuki）
佐賀大学大学院学校教育学研究科・准教授
研究者番号： 30510367

大月友　（Tomu Ohtsuki）
早稲田大学人間科学学術院・准教授
研究者番号： 20508353